

泰山の古代遺跡探訪記

神奈川の古代遺跡シリーズ 001

神武寺・鷹取山探訪記その3 衝撃の神武寺奥の院！

神武寺・鷹取山探訪記その1	神武寺裏参道に行く	http://www.gainendesign.com/taizan/Kanagawa/K001-jinmuji&takatori-1.pdf
神武寺・鷹取山探訪記その2	神武寺境内は女人禁制地だった！	http://www.gainendesign.com/taizan/Kanagawa/K001-jinmuji&takatori-2.pdf
神武寺・鷹取山探訪記その3	衝撃の神武寺奥の院！	http://www.gainendesign.com/taizan/Kanagawa/K001-jinmuji&takatori-3.pdf
神武寺・鷹取山探訪記その4	尾根上の巨石群	http://www.gainendesign.com/taizan/Kanagawa/K001-jinmuji&takatori-4.pdf
神武寺・鷹取山探訪記その5	鷹取山へ！	http://www.gainendesign.com/taizan/Kanagawa/K001-jinmuji&takatori-5.pdf

30-Mar-2010

Gainendesign Labo. Taizan

Copyright© by Taizan 2010 all rights reserved

586 Takakura Fujisawa-shi Kanagawa-ken Japan 252-0802

Tel/Fax 0466-43-4713 Email taizan@gainendesign.com HP <http://www.gainendesign.com/>

先述の美しいピラミッド型をした神武寺裏手山のピーク間近に在るのがこの巨石。存在感的には磐座といえる。苔むした佇まいが凄い！



前ページで言及した磐座と思しき巨石の前にこの不思議な風体の小ぶりな石（長さ1m強）が、「そこに置いてある」。あたかもそれは“祭壇石”のようであって、複数の小石によって明らかに支え構造が成立しているので、「置かれている」といえる。形状がかなり風化してしまっているのでも上面が平面であったのか否かは定かではないが、水の溜まった凹穴があることや、この（仮称）“祭壇石”の形態や存在が明らかに周辺の巨石群と趣を異にしていることを考えると、特別な目的に使用された巨石ではないかと推察できる。



前述の磐座付近に点在するその他の巨石群。特に写真左の手前の石の質感が異なることに注意する必要があるだろう。何かの目印になっている石と考えられる。



前ページの奥の巨石の裏側に回ってみた。自然の風化作用なのか人工的な支え構造なのかの判断は微妙なところだが、左右の巨石共に同じ傾斜角で南の空を向いている。形態的には、これもいままで数多く見かけてきたが、「亀」「蛙」「蛇」と冠せられた石群に似たものを感じる。



右の2枚は同じ巨石で撮影角度が違うもの。上は形態的観点から、下は傾斜角の観点から撮影した。左の写真はその右にあった巨石で傾斜角はほぼ同じ。小石で確度が確保されているようであった。両者とも材質は堆積岩の岩盤ではある。支え構造の白い石は現時点では材質は不明。今後調査委する必要があるだろう。私がこのピークに達したのはちょうど12時頃で、真南の方向から燦々と太陽光が降り注いでいたのが印象的で、巨石が太陽に“向いている”…と強く感じた。この巨石群も重要な対象物であると思われる。



因みに前ページの仰角のある南面を向いた巨石を“亀石”と称するならば、その“亀石”より少し行った断崖上には写真のごとき巨石群が積み重なるように存在している。中央の写真にあるせり出したかたちのサイコロ状の巨石は、これまでも数多くのピラミッド山で見かけてきたものである。

重要なポイントは、“亀石”が明らかに堆積岩特有の積層構造を呈していて、その横方向の水平面を傾けているのに対し、少ししか離れていないこの場所の巨石群はほとんどが丸みを帯びた立体物となっている。中央写真の巨石と右側の写真の巨石は同一物である。その上に立つと巨石の先端部分が亀の頭のように飛び出していることに気づく。ほぼ真南にこの“亀頭”は向いている。さしずめこれは“大亀石”（仮称）というところだろうか。



神武寺裏手山のピーク134.2m地点の三角点。そこにこの頂上磐座がある。趣、佇まいともにすこぶる品のあるよい磐座である。



頂上磐座からの眺望はこれまたすこぶる良い。前方に広がるのが逗子の市街地で、その向こうには三浦半島の付け根に始まる三浦アルプスの双子山が見える。この写真の方角がほぼ真南。もちろん右側に相模湾・江の島を望むことができる。

前述の菱形の記念碑の一文に『海面出没東西間四時・・・云々』とあるので、おそらく昔は海水面の満ち引きがこの辺りで観測できたということだろう。

正式にはこの辺りを「十州望（じゅっしゅうぼう）」というとのことで、この磐座の背面（北側）には同様の磐座があり、そこからは富士・箱根、大山などが一望できる。



神武寺境内の山王社は荒れていることもあって探しにくい。奥の院は既に消失し痕跡すら判別しにくい。ましてや奥の院の深奥に存在する“岩屋”に至っては、ハイキングコースからは全く外れているし、奥の院岩屋を紹介した記事などは殆どないと言える。この探訪記が探究家のみなさんに役立つことを願う次第である。

私自身も2回目の探訪でようやく見つけだすことができた。それも途中、天啓にも似たガイドによって、いつもながらのリスクな崖くだりを決行した。奥の院部分のハイキングコースは、尾根となっており散策に適した平坦路ではあるが、このように南面の断崖部分の木々は、北面のそれに対してすべからく極めて異形でありエネルギーに繁茂している。私は常日頃より樹木の形状や生育状況でその地のエネルギーを見るようにしているが、神武寺本宮台一帯は、巨石群の多さと共に、こうした樹木のありようの凄さが特徴となっている。



↑ 鷹取山に向かう、東方向への散策路。

↑ 尾根南側の異形の樹木。捻じれているものも多数ある。



奥の院南面の岩屋辺りは切り立った断崖で、写真のような巨岩群に囲まれている。このような崖を10m位下降してトラバースをしてゆくことになる。





あった！これが衝撃の奥の院の深奥；“岩屋”だ！・・・巨岩の根元部分がやや広い洞になっている。
本宮台とも称せられる女人禁制だった山頂一帯は修験道の行場でもあったといわれており、一般的なハイカーは殆ど近づかない、否、気づかれない場所にこの衝撃的な奥の院岩屋がある。高さ5m以上はあろうかというオーバーハングしたその巨岩は長年の風化作用も加わってか、すこぶる異形のもので、私もようやくたどり着いた瞬間に「オーッ！」と声をあげたほどである。ここに至るのはかなり困難であり、気軽に近づこうとするのは危険だ。足場が悪く、うっかりすると崖下に転落することになる。

巨大な“獅子岩”（仮称）とでもいうべきその巨岩の下部は、見事に岩窟をなして天岩戸構造を形成している。その中に70 cmほどの観世音菩薩と思しき立像が安置されていた。

この場所こそが神武山の真の奥の院であると・・・私は確信した。神武寺一帯はまさに神の宿る聖なる場所なのである。



神武寺の中心部はやはり医王山の山門、薬師堂、山王権現社、なんじゃもんじゃの樹がある一帯で、ここを熊野になぞらえて“本宮台”と称している。“新宮台”とは切通しから入る客殿や寺院本殿周辺だろう。“那智”は御本家の那智の滝のごとく、やや離れた場所にある。これはあらためて後述する。

“本宮台”から裏山山頂一帯が修験道の行場であり、明治期まで女人禁制地であった『奥の院領域』に相当すると言える。これは実際にその地に行ってみても、さもありなんと納得ができる。その奥の院の核心部分が前ページで紹介した岩窟の岩屋で、そこにやや風化しているが立派な観音菩薩立像がある。

観音菩薩であることは一目でわかったのだが、両手をきっちりと胸の前で合わせている姿はあまり見たことがなかった。現地では一瞬「聖観音菩薩」ではないかと思ったのだが、家に戻ってからいろいろと調べたりした結果、現時点では『十一面千手観音菩薩』であると私なりに解釈している。

一つには、やはり胸前での合掌姿は珍しいこと、また一つには開祖行基が“十一面観音菩薩”を祀ったとあること、その後霊夢の中でも“千手”に関する想いが伝わってきたこと…などを勘案し、そういう思いに至ったしだいである。当該観音菩薩像には“千手”は彫られてはいないが、ネット上で千手観音像を見ると、みごとにその合掌姿が重なってくる。[Wikipedia 「千手観音」 http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%83%E6%89%8B%E8%A6%B3%E9%9F%B3](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%83%E6%89%8B%E8%A6%B3%E9%9F%B3)

この菩薩像に関しては是非専門家諸氏のご意見やご感想をいただければ幸甚である。(泰山宛メール; taizan@gainendesign.com)

岩窟を形成している凝灰岩の巨岩は、尾鷲の鬼ヶ城で見た風食による造形美に似て、この付近では極めて特異な形態をしている。おそらくは南からの海風をまともに受けてこのような風食が進んだのではないだろうか。今は鬱蒼とした樹林が風をやや防いではいるようだ。

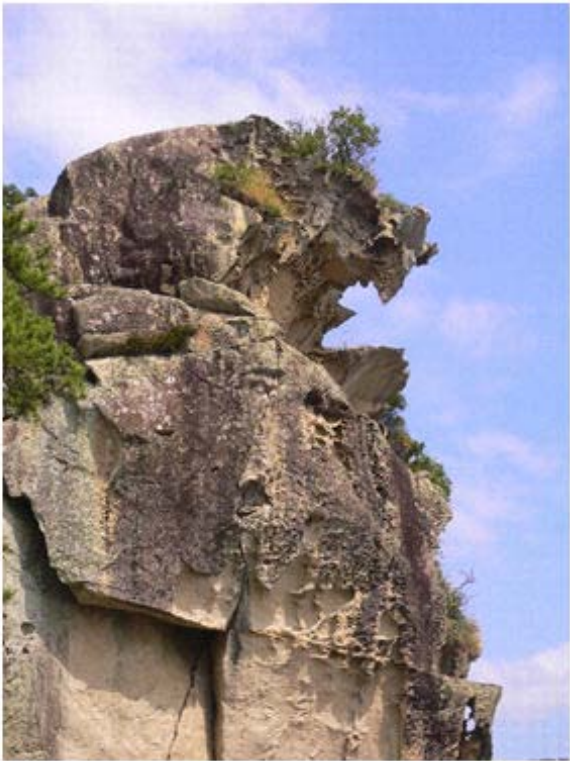
本宮台の山王権現社のすたれ振りをみると真に心苦しいものがあるが、山王権現社や奥の院はきちんと保持されているのだろうか。気がかりになるところである。

“神嶽”とも呼ばれた本宮台一帯が、その名に相応しく永く保持され輝きを放ち続けることを願うばかりである。

2010年3月 泰山 合掌



奥の院岩窟内 観音菩薩立像 photo by Taizan 2010



尾鷲；鬼ヶ城の獅子岩 photo by Taizan 2007

神武寺本宮台の山頂付近での岩窟岩屋到達（発見に近い感覚）は、今回の探訪フィールドワーク中最高の山場となった。これまでも探訪中に幾度となく不思議な感覚を味わったり、期待値以上の遭遇を経験してきたが、今回ののは格別である。

私が永年探究してきている日本のピラミッド山の最も顕著な特徴については、2007年1月にイワクラ学会関東地区（当時）で行われた「巨石サイトオーナー討論会」にて概念表象を発表し、続いて2008年8月に新人物往来社#80号上での論考を公開したように、「その形態」「天の岩戸構造」「水による浄化機能」「遙拝ポイント」「付帯施設としての巨石群」などがあるが、その中でも「天の岩戸構造」としての“陰”の部分は非常に重視している。この重要部分を付帯しえない三角形の山はいくら容姿端麗といえどもピラミッド山としては取り扱うのが難しいのではないかと考えているほどである。

（ちなみに最近では日本ピラミッドではなくピラミッド山というようにしている。イメージ的な誤謬をなるべく避けたいのと、酒井勝軍がいうように日本のピラミッドの原点は何ととっても自然の山の活用にあるからだ。）

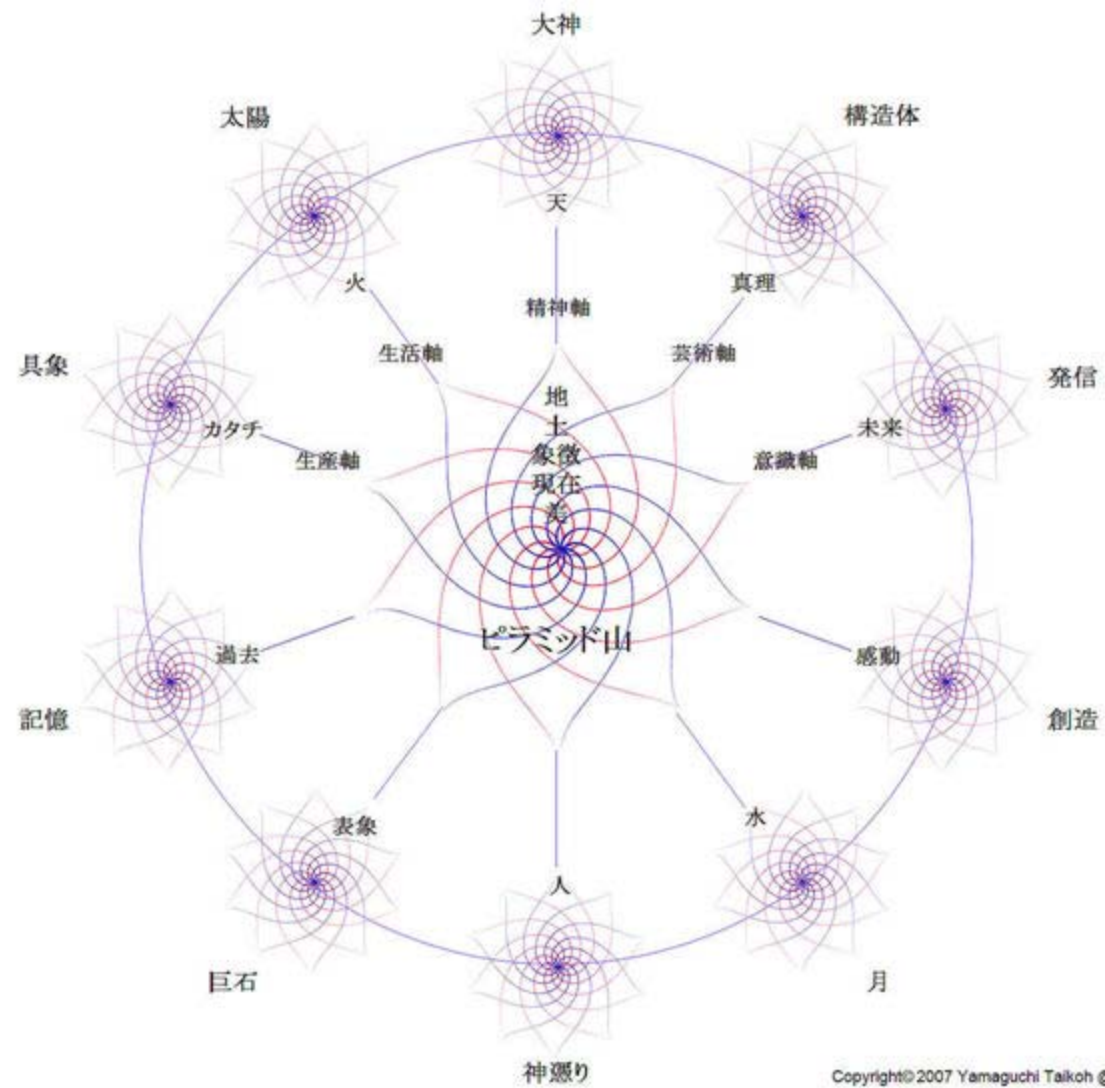
このような観点でいつも探訪を心がけているので、今回も神武山の形態を神武寺客殿がある切通しの隙間から確認できたときに、一気に岩戸構造への期待が膨らんだ。それでも山王社周辺が奥の院に近いことは感じつつも、第一回の探訪時にはどうしても岩屋構造は発見できなかった。山王社裏には実は獣道のような細い道らしきものがあるのだが、荒れ果て過ぎていて、また急な崖になっており初回はそこへ進むことを断念した。

果たして、第二回目の探訪で頂上磐座付近の僅かな切れ目から、ずり落ちるかのようには下降し、ようやくかの岩窟岩屋へ行きついたのである。陰の部分としてのこの岩窟岩屋は神武寺山（神武寺裏山のこと）を形態的のみならず機能的にピラミッド山として認識できる重要な要素であると確信している。

本職である概念デザイナーの基本的な役割は仮説としてのコンセプト提起を行い、それを現実物での確認や創造行為によって検証をしてゆくことであるが、今回も次の2ページの図に示したピラミッド山の概念仮説と諸相が実際の探訪フィールドワークに活かされたといって過言でない。

現地へ出かけ、実物を仮説に照らし合わせて概観し、鳥瞰的に古代遺跡の創造の意図を汲み取れば、期待値以上の発見や、今後活かす何かのヒントを得られると考えている。





Copyright© 2007 Yamaguchi Taikoh @ Gainendesign Labo.





神武寺・鷹取山探訪記その1
神武寺・鷹取山探訪記その2
神武寺・鷹取山探訪記その3
神武寺・鷹取山探訪記その4
神武寺・鷹取山探訪記その5

神武寺裏参道に行く
神武寺境内は女人禁制地だった！
衝撃の神武寺奥の院！
尾根上の巨石群
鷹取山へ！

<http://www.gainendesign.com/taizan/Kanagawa/K001-jinmuji&takatori-1.pdf>
<http://www.gainendesign.com/taizan/Kanagawa/K001-jinmuji&takatori-2.pdf>
<http://www.gainendesign.com/taizan/Kanagawa/K001-jinmuji&takatori-3.pdf>
<http://www.gainendesign.com/taizan/Kanagawa/K001-jinmuji&takatori-4.pdf>
<http://www.gainendesign.com/taizan/Kanagawa/K001-jinmuji&takatori-5.pdf>

その4へ続く

